

<資料>

体育科教育における教師の指導言語としてのリズム表現 —リズム表現が用いられる運動の課題性の探究—

岩田 靖 信州大学学術研究院教育学系

岩倉志穂子 安曇野市立三郷小学校

Rhythmical-Expression as Teacher's Instructional Language in Physical Education

-A Quest for the Nature of Movement-Tasks Using Rhythmical Expression-

IWATA Yasushi: Institute of Education, Shinshu University

IWAKURA Shihoko: Azumino Misato Elementary School

The purpose of this study was to investigate the nature of movement-tasks that were related to rhythmical-expression as teacher's instructional language in physical education classes. In this study, we identified 7 categories. They were (1) movement combination, (2) circulative movement, (3) preparatory movement and main movement, (4) order of movement, (5) correspondent movement to moving object, (6) synchronism of different parts of body, and (7) synchronism with movement of another person.

【キーワード】 指導言語 リズム表現 タクト 運動組み合わせ 循環運動

1. はじめに

本稿の目的は、体育授業において教師が用いる指導言語としての「リズム表現」が対象となる運動の課題性について整理することにある。体育授業において、学習者の運動習得や運動修正に関わって、教師の言語による指導は非常に重要な位置を占めている。その意味で、教師による「指導言語」は教師教育の重要な研究対象として取り上げられる必要がある。しかし、一般的にこの対象への問題意識は低いと言わざるを得ない。

そのことの一つの例証として、岩田・牧田（2018）は、我が国において体育科教育学が成立してきた1980年代以降に出版された体育科教育に関する事典類や専門書、教員養成段階を対象に据えた体育科指導法関係の書籍文献における「指導言語」の扱いについて精査し、それがほとんど記述されてきていないことを確認している。ただし、岩田らは、過去、斎藤喜博の教授学的業績に関連が深く、教師による「教材解釈」の仕事を重視してきた体育科教育研究者の中に「教師の言葉」への注目がみられたことを取り上げている。そこでは特に、動きの「比喩的言語」が考察の対象となっていたことが確認されており、「擬音（擬声）語」についてはその表

現が求められる視点や手法に関する具体的な検討・記述といったところまでは確認できなかったこと、さらには一般的にその使用頻度が高いと考えられる「リズム」的表現についてはほとんど触れられていないことが指摘されている。しかしながら、教師教育において、運動学習を促進しうる「リズム表現」の有用性について熟知しておくことは極めて重要であり、まずはどのような課題性を持った運動学習においてリズム表現が利用されるのかを理解することが必要であろう。少なくとも、リズム表現が有効となる場面を意図的に判断する能力の基礎的なベースを提供するであろう。

2. 研究方法

2.1 「リズム表現」の対象

ここで本稿において抽出を試みる「リズム表現」について限定的な記述をしておきたい。

マイネル, K. (1960:金子訳, 1981)は、「運動リズム」は、運動の「力動的分節」と同様に、「ある運動の力動的構造であり、すなわち、ひとつの運動の根底に横たわっている緊張と解緊の周期的交替」として理解できるとする。それは「循環運動だけでなく、非循環運動にもあてはまるもの」であり、「投げることや跳ぶことにも緊張と解緊の特徴的交替が示される」(金子訳: pp.166-168)とする。そして、マイネルは次のように指摘している。

「スポーツにおける運動リズムの発達と訓練に関する社会的関与ということは、動物にはない第2信号系による人間の働きかけと関わりをもってくるのは当然であろう。周知のことであるが、綱引きのときの“オーエス”，体操のときの“さあ振って—さあ振って”，ステップのときの“ギャロップ，ギャロップ”などのかけ声である。したがって、競技スポーツにおいても、たとえば走高跳び，ハードル走，円盤投げの場合や体操競技の技などの場合に、それぞれの特徴ある運動リズムを言葉で表す多くの造語が行われている。

つまり、人間が自分の運動リズムを体験するだけでなく、言語の助けを借りて運動リズムを意識するという事実、また人間が一定の音声(ラム—タム—タタム—タタ)や言葉(ギャロップ—ギャロップ)あるいはそのほかの手段(タンバリン，音楽など)で運動リズムをとらえやすくしたり、定着させたりできるという事実は、自分自身だけでなく生徒のリズム発達にも意識的に働きかけることさえ可能にするものである」(金子訳: p.171)

これに関わってマイネルは、運動のリズムと「タクト」について、次のように指摘する。

「運動リズムはある運動の力動・時間的分節、つまりある一定の運動課題の経済的解決に必要な緊張過程の強弱を表すものである。これに対して、タクトというものは *tangere* (ラテン語でたたくの意) に語源をもち、その長短はあっても、ある運動の時間経過における正確な拍節上の区分を表すのである」(金子訳: p.172)

このようにマイネルはリズムとタクトを識別するが、運動学習やその指導において対立するものとして位置づけているわけではない。マイネルは以下のように述べている。

「運動リズムは知覚できるのであり、意識的にもつことができ、客観的にとらえることができるのであり、それゆえ制御することもできるのである。運動リズムをタクトによって調整することは実践においてきわめて有効な教育学的補助手段であることがわかっている。新しい運動を習得する初心者やリズム能力が

乏しいものはさしあたってはタクトに合わせて調整しながら運動リズムを浮き彫りにしていくことができる」(金子訳：p.174)

このマイネルの記述について、吉田(1990)は以下のように価値づけ、解釈している。

「マイネルは、タクトをそのような二元論的なリズムの対立物としてとらえることなく、運動リズムの簡易化された訓練方法としてタクトの指導方法的意義を認め、初歩的段階におけるリズム訓練の方法として指導手段のひとつに位置づけている。その考え方の根底には、人間のもつリズム認識の能力に関する次のような事実が存在する。人間は、直接に自己の体験した運動内容を意識化して自己観察することにより運動リズムを認識できると同時に、他者の運動の力動的経過をとりこんで認識する運動共感力を保持し、発達させることができるという事実である」

また、フェッツ, F. (阿部訳 1977) は、運動のリズムに関係していくと思われる運動指導における「聴覚的補助手段」を取り上げて次のように指摘している。

「聴覚的補助手段(akustisches Hilfsmittel)とは、音響でアクセントをつけることを目標とするものをいう。したがって聴覚に与えられる口述での(すなわち概念的な)助けはこれに入らない。音響のアクセントづけは1回だけ、またはリズムカルに(流れるように)与えることができる。一般に音響的な音、あるいはその他の音、または音節が用いられる」

この「聴覚的補助手段」としてフェッツは(a)数での拍子取り、(b)タンバリンと手拍子、(c)音楽伴奏、そして(d)リズムをつける音節を掲げている。これらのうち、本稿で問題とする教師の指導言語に結びつくのは、「数での拍子取り」と「リズムをつける音節」と言ってよい。運動指導の補助的媒体となるリズムやタクトの表現と関係するものである。

さて、佐野(1996)は、指導者が子どもの運動学習の問題点を見出す視点として、「①運動の空間的-図形的内容」と「②運動の力動的な内容」を取り上げ、②については、「実際に身体を動かそうとするとき、どんな感じで行ったらよいかという動きのリズムの関係」であると指摘している。そしてこの「動きのリズム」とは、「動きのなかでの緊張と解緊による動きの力動構造を示すもの」(p.79)であるとして、次のように指摘する(p.80)。

「ここで問題にしている動きのリズムは、動きの構造をとらえるための一つの視点といえるわけですが、それは単なる一つの視点というだけにとどまらず、実際に動きのかたちをつくり出す(空間的-図形的内容)とき、どのような力の配分やタイミングでもって行ったらよいかということを示しているという点では、指導者にとっても動きを覚えようとしている子どもにとっても不可欠な内容をもっているのです」

また、動きのリズムや力動感を子どもに伝えていくことが教師の指導力として求められることを強調しつつ、佐野はその具体的な指導の形式について次のように述べる。

「動きのリズムにおいて取り上げられるこうした動きの力動感は、たとえばグワーンとかグーンといった擬音で示されたり、タンタターン、トントントーンといったタクト的表現を用いて示されることも多いでしょう。さらに、イチ、ニー、サンといった掛け声がかけられることもあります。こうした表現には、運動を行う際にどんな感じで行ったらいいのか、スピード感、動きの起伏といった動きの緊張と解緊の交替、あるいは力の入れ抜きといった運動を実施する際の重要な内容が含まれています。その意味で、こうした表現を用いて動きを教えたり、覚えさせることはきわめて有効だと言えます」

ここでは運動指導におけるリズムに関わった教師の言語的表現のうち、「擬音」は一つの言語形式として区別し、佐野のいう「タクト的表現」、およびリズム的な「掛け声」を特に「リズム表現」として把握しておくことにする。

2.2 研究方法

体育授業における運動学習の指導に関わる書籍文献、体育専門誌を中心に「リズム表現」の具体的事例を収集する。ただし、本稿の中では、器械運動、陸上運動（競技）、水泳、ボール運動系の領域の事例がそのほとんどを占め、それ以外の武道、あるいは表現運動（ダンス）の事例収集までその対象範囲を広げることができなかったことをあらかじめ断っておかなければならない。なお、中には若干、上記の運動領域に対応しない運動例（縄跳びなど）も含まれていることを付記しておきたい。その上で、収集された事例を、そこで求められている運動の課題性の側面から類別する。その際、今後できる限り指導場面を識別していくことに役立つ運動学的な視点を類別のフレームとして設定した。

3. 運動の課題性に応じた「リズム表現」の概要

岩田・牧田（2018）では、教師の指導言語の問題を「言葉の対象」と「言葉の形式」という2つの次元を区別し、その相互関係や、運動の課題性に応じて探究する必要性を述べつつ、以下のような記述をしている。

「…先に『擬音』に関する具体的検討や、『リズム』表現の問題がほとんど取り上げられていないことを指摘したが、これらの表現手法は、運動の流れやその中でのか感、つまり動きの力動性に極めて重要に結びついている。例えば、『リズム』というのは運動の時間的経過を移しとったものであるし、それは一方で『力感』を誘い出すアクセントになりうると言ってもよい。またそのことは動きの力動性、動きのなかでの『緊張と弛緩（解緊張）』を生み出すことにも繋がっていく。このようなリズムの重要性は水泳などの『循環運動』において動きを形成しなければならない場合や、『走って跳ぶ』『走って転回する』などといった『運動組み合わせ』が要求される課題などにおいて指摘できると予想される。また、動きの『タイミング』が学習者の大きな手掛かりになる場合も同様であろう」

さて、今回の資料収集の結果、書籍文献等から約100件の具体的事例が確認できた。収集した資料（リズム表現の具体的な事例）をその運動の課題性の視点から分析・整理してみた場合、岩田らが推量的に指摘していたような「①運動組み合わせ」と「②循環運動」がその主要な部分を占める結果となった。当然ながら資料の収集には文献等の検索・調査にはおのずと限界が存在するし、収集にかけた時間も極めて限定されている。したがって、分析結果は運動の課題性に関する傾向性以上の解釈は不可能であるが、収集した事例のおよそ7割が上記の2つの課題性のカテゴリーに集約されるものであった。

そのほか10例以下の範囲ではあったが、「③予備動作と主動作のリズム」、「④運動の順次性」、「⑤動いてくるものへの対応動作」、「⑥身体の異なる部位の動きの同期」、そして「⑦他者の動きとの同期」といった課題性に纏めることができると考えられた。

- ① 運動組み合わせ (open-skill の場合と closed-skill の場合)
- ② 循環運動
- ③ 予備動作と主動作のリズム
- ④ 運動の順次性
- ⑤ 動いてくるものへの対応動作
- ⑥ 身体の異なる部位の動きの同期
- ⑦ 他者の動きとの同期

4. 運動の課題性による具体的事例

以下に運動の課題性の相違にそって、具体的事例の一部を取り上げてみる。それらの事例が複数あるものは、同じ運動課題場面に対する異なるリズム表現を意味している。

4.1 「運動組み合わせ」

「運動組み合わせ」を取り上げる際、そこには総じて「オープン・スキル」(解放スキル)と「クローズド・スキル」(閉鎖スキル)の場合を区別して整理することができるであろう。

4.1.1 「オープン・スキル」の場合

「オープン・スキル」の場合として以下の代表的事例を掲げることができる。

課題の場面	リズム表現の具体的事例
<野球/ソフトボール> ・ボールを捕って、投げる(捕+投)	○「1/ワン(捕って)・2/ツー(テイクバックして)・3/スリー(投げる)」
<野球/ソフトボール> ・ゴロ捕球からのスローイング(捕+投)	○「トーントツ」→「トーントツ」 ○「1(右足)・2(左足)・3(捕る)・4(投げる)」
<バドミントン> ・ステップからのショット(ステップ+打)	○「パッ(ステップ)・2(移動しながらテイクバック)・3(打つ)」
<バレーボール> ・助走(ステップ)からのアタックのジャンプ(走+跳)	○「1(左足を小さく出し)・2(右足を大きく出して)・3(左足を揃えてジャンプ)」 ○「タッタターン」 ○「タン・タ・ターン」
<バスケットボール> ・レイアップシュートのステップ(走+跳)	○「タンタン・フワーツ」 ○「タン・ターン」 ○「ターン・タン・タンツ」 ○「トン・ト・トーン」

なお、動いてくるもの(ボールなど)への対応動作においてもリズム表現が用いられる。例えば、バレーボールのアンダーハンド・パスにおいて、ボールの軌道に合わせてステップして正面に入り、ボールに当てて送り出すような課題において、「1(ステップ)・2(ボールの正面に入り)・3(ボールに当てる)」といった例が見出される。これは「運動組み合わせ」と同時に、

「動いてくるものへの対応動作」といった課題性が複合的にみられる場合を示している。

4.1.2 「クロズド・スキル」の場合

「クロズド・スキル」の場合として以下の代表的事例を掲げることができる。

<p><サッカー> ・止まったボールのキック (ステップ+蹴り)</p>	<p>○「ホップ (予備動作としての小さなジャンプ)・トン (ボールの横へ軸足を下ろす)・キック」</p>
<p><陸上運動> ・ハードル走のインターバルの走り と 踏み切り (走+跳)</p>	<p>○「0・1・2・3～」 ○「トン・1・2・3～」 ○「1・2・3・ジャンプ」</p>
<p><陸上運動> ・走り幅跳びでの助走からの踏み切り (走+跳)</p>	<p>○「1・2・1・2・3 (素早く走り込み, 踏み切る)」 ○「ト・ト・ト・ト・トーン」 ○「タン・タン・タ・タ・ターン」 ○「イチ・ニ・イチ・ニ・イチ・ニ・サーン」</p>
<p><陸上運動> ・走り高跳びでの助走からの踏み切り (走+跳)</p>	<p>○「1・2・3～!」 ○「1・2・3・1・2!」 (5歩助走) ○「1・2・1・2・1・2・3!」 (7歩助走) ○「1・2・3・4・1・2・3!」 (7歩助走)</p>
<p><器械運動> ・マット運動の前方倒立回転の助走のステップと着手 (足の振り上げ) (走+回転)</p>	<p>○「タン・タ・タン」 ○「タッ・タ・ターン」</p>
<p><器械運動> ・跳び箱運動の開脚跳びの助走と跳躍 (走+跳)</p>	<p>○「サーッ (予備踏み切り)・タン (両足踏み切り)・パッ (着手)・トン (着地)」 ○「ケン・ケン (助走・予備踏み切り)・グー (両足踏み切り)・トン (着手)・パッ (着地)」 ○「1・2 (助走・予備踏み切り)・足 (両足踏み切り)・手 (着手)・足 (着地)」</p>

ここでは陸上運動系および器械運動系における「助走」と「跳躍」の組み合わせの事例が多数収集された。この中で、例えばハードル走は、「走」という「循環運動」と「跳」という「非循環運動」の「運動組み合わせ」であると考えられ、部分的に次に取り上げる「循環運動」の要素を部分的に持ち合わせているとも言える。

4.2 「循環運動」

「循環運動」を対象とした以下の代表的事例を掲げることができる。

<p><陸上運動> ・ハードル走の低位教材としての1歩ハードル</p>	<p>○「1 (着地)・ジャンプ (踏み切り)・1 (着地)・ジャンプ (踏み切り) ……」</p>
<p>・スキップ/ギャロップ</p>	<p>○「タタン・タタン・タタン……」 ○「ターンタ・ターンタ・ターンタ……」</p>

	○「パン・パパン・パパン・パパン……」 ○「トット・トット・トット……」
<器械運動> ・下位教材としてのうさぎ跳び	○「トン・パ・トン・パ……」 ○「手・足・手・足……」
<器械運動> ・鉄棒運動のダルマ回り	○「伸ばして・曲げて・伸ばして・曲げて……」 ○「伸ばして・たたんで・伸ばして・たたんで……」
<器械運動> ・鉄棒運動の前方支持回転（連続）	○「ぐる～ん・ぐる～ん……」
<水泳運動> ・クロールのストロークと呼吸	○「イチ・ニ・サン・プハツ（呼吸）……」 ○「かいて～・パツ・イーチ・ニー……」
<水泳運動> ・平泳ぎのコンビネーション	○「かいて～・けて～・かいて～・けて～……」
<水泳運動> ・バタフライのコンビネーション	○「ワン・ツー・ワン・ツー……」 ○「トーン・トン・トーン・トン……」
<縄跳び> ・スキップ跳び	○「トントン・トントン……」 ○「トーント・トーント……」
<縄跳び> ・二重跳び	○「ビュビュッ・ビュビュッ……」 ○「シュシュン・シュシュン……」

ここには器械運動の回転運動を連続させる課題、および水泳運動の泳法、加えて縄跳びの連続的な運動課題に対応してリズム表現が用いられていた。なお、陸上運動系における長距離走での呼吸のリズムの指導もここに含めることができよう。

4.3 「予備動作と主動作のリズム」

「予備動作と主動作のリズム」を対象とした以下の代表的事例を掲げることができる。

<野球/ソフトボール> ・バットスウィング	○「1（テイクバック）・2（踏み込み足を地面につける）・3（インパクト）」
<テニス> ・フォアハンド・ストロークの素振り	○「イーチ（テイクバック）・スウィング」
<ボール投げ> ・ボール投げの初歩的段階	○「1（手を胸の前で交差）・2（利き腕をテイクバックし、体重を軸足側に）・3（投げる）」
<器械運動> ・鉄棒運動の逆上がり	○「1・2の3」 ○「タターン（踏み込み足と振り上げ足）・クルン」
<器械運動> ・鉄棒運動の後方膝掛回転	○「イーチ（振り足を後ろから前に）・に一の（足を前から後ろに振り、足を鉄棒に掛ける）・さ

	ん！（肩を後方に倒しながら振り足を前に） ○「トン（腰を後方に）・クルリン」 など
<器械運動> ・鉄棒運動の前方支持回転 （足の振りと上体の落とし）	○「いーち（両足を後ろから前に）・にー（両足を振り戻す）・いーち（もう一度前に）・くるん（上体を回転させる）」

運動における主動作をスムーズに導くために予備動作からの動きを結びつけていく課題性が生じてくる。その結合を誘い出すための「リズム表現」は、ここに掲げたこの意外にもかなりの広がりをもって工夫されている可能性が高いであろう。

4.4 「運動の順次性」

「運動の順次性」を対象とした以下の代表的事例を掲げることができる。

<器械運動> ・マット運動の前転	○「いーち（手をつく）・にーい（腰を上げる）・さーん（回る）」
<器械運動> ・マット運動の開脚前転	○「くる～ん・パカッ！」（回転－開脚）
<水泳運動> ・背泳のストローク	○「いーち（片手を真上に伸ばす）・にーい（体の横から腿の下に水をかく）」
<武道> ・剣道の小手から面打ち	○「タ（小手）・ターン（面）」

「リズム表現」は本質的に「時間」を孕んでいるのであるから、運動の時間的な流れ、変化を対象にしている。したがって、すべてにわたって「運動の順次性」に結びついており、とりたてて1つの項目として括るのはカテゴリー的に相応しくないかもしれない。ただし、動きの変化の流れのタイミングに関わって、ここではこのまとまりを表現してみた。

4.5 「動いてくるものへの対応動作」

「動いてくるものへの対応動作」を対象とした以下の代表的事例を掲げることができる。

<テニス> ・グランド・ストローク	○「ボーン（バウンド）・ボーン（打つ）」 ○「1（ボールがバウンド）・2（跳ね上がり）・サーン（ラケットを振る）」
<バレーボール> ・サーブ・カット	○「1（動き）・2（ボールの正面に入ってボールを引きつけ）・3（ボールに当てて送り出す）」
<縄跳び> ・2人手つなぎ跳び	○「1・2・3・歩いて（縄を回す人に体を向ける）・ぴょん」
<縄跳び> ・ダブルダッチ	○「入ってジャンプ・入ってジャンプ」 ○「トーン・トーン・トントントン」 ○「トン・トン・トン・トン」

これらのほか、同様にボール運動系における「動いてくるボールへの対応」の他の例、およ

び縄跳びの「動いてくる縄への対応」の事例が確認された。時間的に変化するものに応じた動きのタイミングに関わる運動群の一部と言ってよいかもしれない。

4.6 「身体の異なる部位の動きの同期」

「身体の異なる部位の動きの同期」について以下の代表的事例を掲げることができる。

<卓球> ・サーブ (左右の手の同期)	○「1 (利き手のラケットをテイクバックし)・ 2 (反対の手でボールをトス)・3 (打つ)」
<バレーボール> ・ドライブ・サーブ (左右の手)	○「1 (トス)・2 (利き腕を引く)・3 (利き腕で 巻き付けるようにスナップをきかせて打つ)」
<器械運動> ・マット運動の側方倒立回転 (手と足の同期)	○「1 (手)・2 (手)・3 (足)・4 (足)」 ○「い〜ち・にの・さん」
<剣道> ・面打ち (足の踏み込みと手の振りの同期)	○「タ (踏み込み)・タン (振り)」

ここに取り上げたのは、右手と左手の動きをどのように結びつけるのか、手と足の動きはどうか、といった身体の異なる部位の動きの流れが重要なポイントになるものである。

4.7 「他者の動きとの同期」

「他者との動きの同期」を対象とした以下の代表的事例を掲げることができる。

<3人4脚リレー> ・走のピッチ	○「1・2・1・2」
---------------------	------------

体育授業の既存の運動領域に取り上げられる運動課題においては、自分以外の他者の動きにリズム的に対応するようものはあまりみられないが、ここでは集団的に走のリズムを合わせなければならない場合のような課題が取り上げられるであろう。

5. 複合的な運動の課題性の事例

以上、「①運動組み合わせ」から「⑦他者との動きの同期」まで、運動の課題性を識別しながら対応した事例を取り上げてみたが、実は、それぞれの運動の課題性は、区分けしたカテゴリーに明確に1対1対応しているわけではないことも説明しておく必要がある。④の「運動の順次性」のところでも付言したように、運動は「時間」の流れのなかで生起しており、「リズム表現」はその「時間」の中での動きの力動性に関わっているため、基本的に「運動の順次性」と結びついていると言える。したがって、他の運動の課題性として括ったものは、その前提として「運動の順次性」を包含していると考えてもよい。

また、そのほかにも複数のカテゴリーにまたがって考えることができる運動課題もみられる。例えば、器械運動領域の跳び箱運動における「開脚跳び越し」は、走って跳ぶ「運動組み合わせ」のわかりやすい運動課題例ではあるが、そこでは「足と手の運動の順次性」が重要になり、「身体の異なる部位の動きの同期」に類似した足と手の連続性の手がかりがリズム表現に託されていると言える。また、鉄棒運動における「逆上がり」の場合には、「予備動作と主動作リズム

ム)として捉えたが、これも軸足での踏み切りと振り上げ足といった「身体の異なる部位の動きの同期」が問題になる課題性をも有している。同様に、鉄棒運動の前方支持回転における足の振りと上体の落としの課題も、予備動作と主動作の結合の問題であるとともに、身体の異なる部位の動きの結びつきの課題性を有している。

さらに、「運動組み合わせ」の例示のところで付記したように、バレーボールのレシーブなどにおいて、下半身(足)のステップと手によるボール操作といった組み合わせを、動いてくるボールに対応させるような場合の「リズム表現」では、「運動組み合わせ」と「動いてくるものへの対応動作」という複合的な課題性が求められていると言える。

6. おわりに

本稿では、運動指導におけるリズムに関わった教師の言語的表現のうち、「タクト的表現」、およびリズム的な「掛け声」を「リズム表現」として把握し、それがどのような運動課題において用いられるのかについてデータを収集し、整理を試みた。

ここでは、リズム表現が用いられる運動の課題性として、「①運動組み合わせ」、「②循環運動」、「③予備動作と主動作のリズム」、「④運動の順次性」、「⑤動いてくるものへの対応動作」、「⑥身体の異なる部位の動きの同期」、「⑦他者の動きとの同期」が見出された。収集された事例の約7割は、「①運動組み合わせ」および「②循環運動」として識別できるものであった。事例の収集範囲も限定されており、収集時間にも限りがあるため、この7割という数値には確定的な意味があるわけではないが、この2つの運動の課題性が多くを占めるのは十分に予想できることである。そしてまた、③以下の項目が整理できることによって、学習者が取り組む運動課題に対応して、「リズム表現」を駆使してみようとする教師の意思決定のベースが拡大されることが期待される。とりわけ、教師前教育(養成教育)段階での教科教育学的知識として学習しておくべき知見の一部になるうかと思われる。

文献

- フリードリッヒ・フェッツ, 阿部和雄訳, 1977, 体育の一般方法学, プレスギムナスチカ, pp.117-127
- 岩田靖, 牧田有沙, 2018, 体育授業における「指導言語」研究に関する系譜と展望, 長野体育学研究 24, pp.1-14
- クルト・マイネル, 金子明友訳, 1981, マイネル・スポーツ運動学, 大修館書店
- 佐野淳, 1996, 動きのリズムを見つける, 吉田茂・三木四郎編, 教師のための運動学, 大修館書店, pp.78-85
- 吉田茂, 1990, 運動構造の運動学的認識, 金子明友・朝岡正雄編, 運動学講義, 大修館書店, pp.88-100

(2021年7月27日 受付)